

「鉛筆」の話

先日、先生は、小川洋子さんという作家の書いた「そこに工場があるかぎり」という本を読みました。

これは、小川さんが、いろいろな工場を見学してその内容をまとめた物です。大人版社会科見学みたいでとても面白かったです。その中に、鉛筆工場の話が出てきます。ということで、今朝は、日頃私たちがお世話になっている「鉛筆」についてお話します。

鉛筆は、芯のまわりを木で覆って手が汚れないようになっていますが、その始まりは黒い炭の固まりでした。イギリスの鉱山でとれる黒い石で字が書けるとうことで、その石を木ではさんだり布でまいたりして使っていたそうです。これは便利だということで、イギリスだけでなくお隣のフランスなどでも使い出すのですが、ナポレオンの時代にイギリスとフランスが戦争になると、ナポレオンのフランスにイギリスから黒い石が入ってこなくなりました。これは困ったということで、ナポレオンは、何とかしろと部下に命令を出すのです。そのときに、発明家のコンテという人が、粘土と黒鉛を混ぜ合わせて焼いて芯を作るという今の鉛筆の元となる技術を開発したのです。

粘土と黒鉛の割合を変えることで、芯の柔らかさや濃さが変わります。今の「B」や「H」という記号でそれを表しています。2B, 3B, 4B と数が増えるほど、柔らかく濃くなり、H, 2H, 3H と数が増えるほど硬く濃さも薄くなります。この記号もコンテさんが考えました。

日本には、いつ頃入っていたと思いますか。現存する一番古い鉛筆として、日光東照宮という神社に徳川家康が使ったとされる鉛筆が伝わっています。

芯を包んでいる木ですが、これは、一度ゆでるのだそうです。ゆでることで木自体が柔らかくなり、削りやすくなるといいます。そこに今度は、ろうをしみ込ませて、つるつるした感じを出します。鉛筆といっても単純な作りではない、たくさんの知恵と作る人の苦勞がしみ込んでいるのですね。

ところで、1本の鉛筆で線をひいていくと、50キロメートル書けるといいます。ボールペンでは、1500メートル、サインペンでは700メートルといえますから、1本の鉛筆がいかに大きなエネルギーをもっているか明らかです。「50キロメートルにも及ぶ果てしない旅路を伴走し、自らは姿を消す。」なんと謙虚な道具でしょうか。

最後に、鉛筆工場の方の言葉を紹介します。

「鉛筆は、減った分だけ、何かを生み出しているんですよ。子ども達が勉強をして、夢をかなえてゆく。それを担っているのですから、鉛筆は素晴らしいなと思います。」今週も始まりました。今日も勉強で鉛筆は大活躍すると思います。心をこめて大切に使っていきましょう。

これで、今朝のお話を終わります。